

「教養の文学」を適切に授業展開するための方策 ―時代背景の理解から解釈変容へ―

How to improve literary classes for liberal arts: To change the interpretation through understanding the historical background

* 工藤 真由美
(Mayumi Kudo)

読書が好きな学生が、専門分野としてではなく、教養科目として文学を学ぶ際に、何が重要であるのかという問題意識から、本稿においては三浦しをんの『骨片』を学生に読ませ、解釈に必要でありながらも欠如している時代背景や風俗風習の知識を補う前後で、感想文の内容を考察した。その結果、解釈に大きな変容がみられた。このことから教養科目として文学を読むための授業展開として、学生に不足している時代背景の理解や風俗風習に関する知識を補う多角的な補足を行い、教養を深めることを繰り返すことが重要であることがわかる。それにより、生涯にわたり読書する際においても解釈を深めることを促すことができると考えられ、教養科目として文学を学ぶことの意義は大きいといえる。

Key words: 教養、文学、三浦しをん、「骨片」

一、問題の所在と本稿の目的

学生の活字離れ、読書離れ、語彙力の不足、読解力の低下などについて言及されて久しい。しかし、一定数の読書好きが存在するのも事実である。筆者の担当する学科ではコース制を導入せず、学生が興味に応じて自由に科目や資格を選択して学ぶスタイルを採用している。よって、文学専攻などの専門的に文学を学ぶ学生とは学び方が異なる。特に、教養科目として文学に親しむ科目「教養の文学」は、この傾向が顕著で、読書は好きだけでも深く文章構造を理解して鑑賞する、作者の意図を推察するなどは念頭になく、ただ小説を読むことができるので受講するというものが大半である。

しかしながら、そうであるからこそ、「教養として」小説を読む読み方を学ぶことの意義は大きいと言えるのではないだろうか。このような問題意識から、本稿では、学生が興味を示す「恋愛小説」を題材とし、その背景となる時代をどう理解するのか、その時代背景や風俗風習の知識を埋めることがどのように学生の読解の深さに関わるのかについて考察する。

* 四條畷学園短期大学 ライフデザイン総合学科

二、授業における観点と実際

対象学生10名に三浦しをん『骨片』を読ませ、背景となる時代や風俗風習などの理解がどの程度、解釈の深さに影響するかを検証する。

今回題材とする『骨片』は、三浦しをんの短編恋愛小説として、恋愛の様々な形がつづられた他の短編とともに『君はボラリス』に所収されている。初出は2002年である。

（高校の教科書でも一部抜粋という形で扱われている。）

解釈のための時代背景の理解が必要な箇所は二か所ある。

一つは、女の身で大学を出ることへの社会の不理解と偏見。大学卒の女性は職業婦人として身を立てることにつながる特別な存在であったこと。

もう一つは、結婚にまつわる女性の受け身な事情。適齢期などという目に見えない偏見と、釣り書きと写真のみの見合い結婚。多くを考えず決められた結婚に進む人生。

特に主人公の抱えている心の闇の深さを知るためには、時代背景として、女の身で大学に行くことに対する世間の風当たりの強さと、それがどれほど女性に心理的な負担をもたらしていたのかを理解することが重要である。実は祖母の心にも、意識する、しないに関わらず、大きな闇が潜んでいたと考えられる。また、人生の決断を他にゆだねて生きることには深い疑問を感じずに生きる生き方を良しとする時代を理解することも重要である。それを知ることが、主人公の生き方（結婚、愛を貫くことの）、芯の強さを深く理解するために必要である。

以上の二つの観点を補うべきポイントとして、授業を進めていく。

三、授業における学生の解釈と筆者の考察

物語の流れ① 女性が学ぶことについて

女の身で大学を卒業した私、蒔田朱鷺子は、職業婦人になるでもなく結婚をする

でもなく故郷に戻り家業の菓子店を作る店を手伝う。女の身で学問なんぞ、しかも文学など何の身の助けになるものかと、周囲の者からさんざん言われ続けた私の自尊の感情からくる羞恥。卒業式の日、大学の研究室で、社会に出ていく男子学生に交じり、取り残されたような感情を抱く私に先生は次のような言葉をかけた。

「文学は餡をこねること自体には必要のないものかもしれないが、餡をこねる貴方自身には、必要という言葉では足りないほどの豊穡をもたらしてくれるものではないですか」「『嵐が丘』の作品の舞台は荒野とそこに立つ二軒の家しかないと言っている。だがその世界を狭いと感じる人がいるでしょうか。いや誰もいない。そこにはすべてがあります。愛と憎しみが、策謀と和解が、裏切りと赦しが、その他ありとあらゆる、人間のすべてが嵐が丘にはある」と。

卒業後数年がたち、先生は若くして急逝する。その先生の葬儀の日、私は焼き場でそつと先生の骨片を掌に忍ばせ持ち帰る。先生への恋心。この世では成就することのない愛。しかしその純粹な愛は、のちに登場する祖母の生き方との対比から、形を違え一生貫く愛へと変貌する。女の生き方として自分を貫く主人公とその対極に位置付けられ、反面教師としての女性として描かれる祖母の生きざまがある。

焦点化するシーン①

本文には以下のように表現されている。

「学部全体を見ても、女子学生は十数名しかいなかった。畢竟、その全員と私は顔見知りであったわけだが、職業婦人になるものもあれば嫁ぎ先が決まっている者もあり、女でありながら大学を出て、その結果郷里で家業を手伝うしかない者など私ぐらいのものだった。

その年の卒業生で先生の直接の教え子は五人であり、そのうちで女は私一人であった。仲間の男子学生たちはそれぞれ、卒業の喜びと若干の不安に胸震わせ、明日から漕ぎだしていく社会への責任感に顔を輝かせていた。私はつい昨日までの友人であった彼らがふいに遠くへ行ってしまうような、自分だけが取り残される心持がして、研究室の中で一人、うつむきがちであった。」⁽¹⁾

「何を恥ずかしがるかがあるものか。家の者は誇りを持って仕事をしている

し、これまで私が学問に打ち込むことを嫌な顔一つせずに応援してきてくれたではないか。いくらそう言い聞かせても、高い志を語る友を前にしては、女の身で大学まで来た私が、医者や外交官や大きな商家の娘ではなく、菓子店の材料を作る小さな店の娘であることをいうのは憚られた。」⁽²⁾

「私は自分の生まれた家の生業を恥じた。女の身で勉学など、ましてや文学などなんの腹の足しにもならぬことをしてなんになる。これまで何度となく言われ続けた言葉が、投げかけられた視線が、私の怯懦と卑屈な心を煽った。そしてまた、そんな周囲の偏見に挫け、家業を、身につけた学歴を、恥じ続ける自分を恥じた。ここには私を白眼視する人間など誰もいないにもかかわらず、すべてを恥じている。そんな自分を恥じた。」⁽³⁾

これらの箇所には「女の身で」、「女でありながら」という表現が何度となく繰り返される。

この部分を理解するのは現代の学生にはなかなか難しい。

学生の解釈①

焦点化するシーン①に描かれている朱鷺子の状況を学生は以下のように解釈している。

「女とか男とか気にしすぎだと思う」「女だからというのはいすごく偏見が強くて、信じられない」「自分の周りに女性とか男性とかで気にしている人はいないと思う」「時代が違うのだなと思った。」「昔の女の人は色々決めつけられてかわいそうだと思った。」「今の時代にはありえないな。」などである。

現代の状況の延長上で主人公朱鷺子をとらえ理解することに留まっていることがわかる。

筆者の授業での補足①

学生の感想にみられる反応には、「時代の違い」という言葉が出てくる。ではどれだけその実態を知っているかという点と皆無であった。そこで以下のような補足をした。

まず、作品の舞台となった時代は明確には描かれてはいないが、「大学」という名称が使用されていることから、新制教育制度が始まった昭和二十一年以降の大学を舞台としていることがわかる。その時代に共学に通う女性の主人公が描かれている。昭和三十年代後半に女子短期大学が多数設立され、花嫁修業学校などと言われる隆盛を極めたのも昭和四十年代以降である。統計的にみると、当時の高等学校進学率が昭和25年から35年にかけて50%程度、昭和五十年代によりやく90%を超えた。さらに女子の大学短大進学率は昭和三十年代で12~15%程度、昭和四十年代に入りよりやく20%台となる。当時の大半は短期大学への進学である。同じく男子の大学短大進学率も20%~25%で推移する。男女ともに大学進学率が50%を超えたのが、平成二十七年である。⁽⁴⁾

さらにさかのぼり、現在のように身分にかかわらず公教育を受けられるようになったのは、明治五年の「学制」発布以来であること。それまでは教育とは、武士や貴族などの支配者階級や高貴な身分の層の教育を指し、しかも男子のみの教育であったことなどに言及した。「学制」以後の義務教育も長らくは「小学」の四年ないし六年であったことなどである。以上のような「教育学」の観点からの補足を行った。

その後の学生の解釈①

このような教育の歴史についての説明を受けると、学生の反応は夙に変化した。

「女子に教育がなかったなんて驚いた。女性差別が根深いのはほんの少し前まで教育を受ける権利がなかったのだからわかる気がする」「女の身で勉学なんぞ何の役に立つのか?という小説で述べられた文が、その時代はとも当たり前の発想なのだとわかった気がした。」「すくく女性は冷たくあしらわれていたと感じた。」「そんな風に女性が生きていた時代は生まれていたらどうなっていたかなと自分のことを考えてみた。きっと私は周りの目に負けて学校に行っていなかったと思うし、そこまでして勉強しようと思わなかったと思う。主人公は自分の意思をしっかり持っていてすごいと思った。だからこそそれを活かした仕事に就けないことに対する複雑な心が表現されていると感じた。」

筆者の考察①

当初の学生の解釈では、単なる男女の差、男女差別というような観点でのみ語られている。補足説明を受けた後の解釈では、歴史的に男女がたどった道筋に初めて触れ、驚きとともに、現代の状況は当たり前ではなく、歴史の変遷の上でほんの少し前に作られた歴史の浅いものであることへの驚きが記されている。さらには驚きだけでなく今ある自分の置かれた状況を歴史との対比で試みようとする姿勢がみられ、そこに小説の解釈への深みの端緒が垣間見られるようになった。

物語の流れ② 大学卒業後の朱鷺子と祖母の生き方

主人公の朱鷺子は大学卒業後、地方の菓子作りを営む実家に戻り、祖母、母、兄、嫂、姪と同居し、家業を手伝いながら忙しく日々を送っていた。家族は大学で学ぶことを理解し援助し卒業まで支えてくれたが、戒講に訪れる菓子組合の男たちは、酔った勢いで口々に「もったいないね、学士様」「学士様、講義をしてくださいよ」という。朱鷺子を「学士様」と呼ぶのは彼らの悪気ではなく、地方には珍しい大学出の女のちよつとした物珍しさと、どのように扱えばいいのかわからない女に対する照れ隠しがそれを言わせている。「息苦しい。盆を投げ捨てて叫びだしてしまいたい、何を叫べばいいというのだろう。」という感情にさいなまれるが、その一瞬を我慢すれば、また通常の平凡なただ忙しだけの日常になる。そのような朱鷺子を慰めるのは、先生の「骨片」である。鏡台に忍ばせたそれを掌で遊び、先生を愚んだ。

同居する祖母は、体はどこも悪くないが何十年も部屋にこもり床に臥せている。何の楽しみもなく寝床で食事し、芝居に出かけることもなく、ただ日がな一日、狭い部屋の中で過ごすのである。菓子の材料を仕入れに来た祖父に容姿を見せめられて請われて嫁に来たが、田舎育ちの娘が、城下町のにぎわいや商家のあわただしさになじまず、毎日が苦痛でしかなかったのだろう。

祖母の生き方と自分の生き方を自問自答する朱鷺子に兄が縁談話を持ちかける。来年東京の大学を出る同じ菓子を作る老舗の和田金の親戚筋の息子である。年は下

だが、つり合いは取れる。これは最後の縁談になるだろう。大学在学中からすでに縁談が来なくなるほど、当時の女性としては結婚が遅れている。しかも大学出身者など珍しい周りの状況で、朱鷺子に釣り合う相手を探すのは至難の業である。しかし朱鷺子はその縁談を断わる。もう死んでしまった先生との結ばれない愛に生きようという強い決断をする。

焦点化するシーン②

本文には以下のように表現されている。

「祖母も何かを叫びたかった。言葉にならぬ叫びは祖母の身のうちに降り積もり、やがて起きることもままならぬほどに重くなる。自分の内部にしこったものを見据えるのはつらい。祖母は保障された日々に身をゆだね、安寧の中にたゆたうことを選ぶしかなかったのだろう。」⁽⁵⁾

「では私はどうか。このあたりの男たちの誰よりも高い教育を受け、先生の薫陶を一身に浴びたはずの私はどうか。書物を紐解く時間もないほど家事に奔走し、叫ぶための声を押し殺している私は祖母とどこが違うのか。」⁽⁶⁾

「大学に通っている間に縁談の話も来なくなったほど嫁に行き遅れている身ではある。だからと言って、どんな人物かもわからぬ男と結婚といわれても実感の沸きようがない。」⁽⁷⁾ そのような朱鷺子は祖母に聞く。「結婚して幸せだった？」祖母は「どこに行ってもおんなじさね。」と答えた。

後日朱鷺子は兄に答えた。

「『どちらでもよろしいんですか』『そんなら私は嫁に行きたくありません』私は先生が好きである。先生がもうこの世の人ではなくとも、先生と私の間に血の通った男女の語らいが一度たりともなかったとしても、私は先生を好きだということに変えられないのである。もしこのことをまげて私が誰かの妻になったとしても世間の誰も私の恋情を知らぬのだから、私を指弾する者はあるまい。しかしそれでは私は私の心に対して大きな背信を犯すことになる。」⁽⁸⁾

この決意には同じ女性として、しかも反面教師としての祖母の生き方がある。「己の心に対する背信の淵に沈んでいる人を、私は生まれた時から身近で見てい

る。祖母は己の心に刺さった何らかの棘が、自分を寢床へと打ち付けていることに気付いていない。気づこうとせぬまま結婚生活を続け、子を産み、自らの手で育てることも看取することもせず、今日も健康を害することへの恐れのみに震えながら寢床でまどろんでいる。どこへ行っても同じ。祖母の言葉は半分は正しく、半分は間違っている。祖母の寢床。その狭い世界。そこにどんな豊穡が潜んでいるのか、知っている者は誰もいない。もしかしたら祖母自身も知らないのかもしれない。己の淵に沈むばかりで、踏みとどまって底を覗こうとしなかったためだ。怠惰を安定と見間違えたためだ。私はその、人の陥りやすい過ちにははまるまい。私は今、それを心に決めたのだ」⁽⁹⁾

学生の解釈②

焦点化するシーン②に対する学生の解釈は以下のようなものである。

「なんで釣書きと写真一つで結婚を決めなければならないのかわからない。」
「結婚は人生の大事な出来事なので、簡単には決められないし、人に決められたくないと思う。朱鷺子はかわいそう」「見合いなんて考えられない。私は好きな人を自分で選んで結婚したい。」

「死んだ先生をここまで愛せるなって素敵」「純愛」「朱鷺子の先生を思う気持ち
ちは純粹で、だから見合いなんかで仕方なく結婚するよりいいと思う」

学生自身、見合い結婚などは、なかなか実感がわかないという状況理解が表現されている。

筆者の授業での補足②

そこで昭和三十年代から四十年代にかけての結婚事情を補足説明する。恋愛結婚も当然あったが、やはり見合い結婚も多かった。昭和十五年当時見合い結婚は70%を占め、戦後、昭和二十五年から三十年代は60%近くを見合い結婚が占めていた。昭和四十年代に見合い結婚と恋愛結婚がほぼ同数となり、昭和四十五年以降は逆転するようになった。⁽¹⁰⁾

しかし、都市部とそれ以外では、状況は多少異なる。見合い結婚の方法はまさに

釣り書きと写真であり、一度の見合いで結論を出すことは多かった。この小説の中の祖母の年代では、直接相手に会うこともなく、嫁ぐということもあった。女性は受け身であり、自分の意思を表すことは少なかった。それが当たり前として教育され生きてきた。周りもそうなので自分もそうしたのである。以上結婚に関する「風俗史」の観点から補足を行った。

その後の学生の解釈②

授業での補足をおこなったのちの学生の解釈は以下のようなものである。

「祖母の時代は女性が見えを言うのは良くないと育てられた時代だったかもしれない。でもそんな時代でも祖母は嫌な結婚で起きられなくなってしまったのかもしれない。でも朱鷺子は大学にまで行った女性で、その時代の女性の中でも珍しいので、自分で考え自分の意志で行動することができたと思う。だから周りに流されず自分の意志で先生への叶うことはないけれども純粹な愛を貫いて見合い結婚を辞めたと思う。先生が好きであるというきつぱりとした文が感動した。」

「見合いで結婚した祖母は、そんな結婚に疑問も持たず生きてきた。でも体は正直で、起きられなくなっている。朱鷺子は祖母の生き方をみて自分はどう生きようか悩んだと思う。でも祖母がいたからこそ、あんな生き方は嫌だと思って、最後は見合いを断り、自分の気持ちに素直に生きようとした。死んだ先生と結婚はできないけれど、死んだあとお墓で一緒になれると考える純粹な愛は素晴らしいなと思った。」

「私も祖母の時代に生きていたらきつと祖母のように当たり前に見合い結婚をしていたと思います。そして朱鷺子の時代に生きていても私は見合い結婚をしていたかもしれない。」

人の陥りやすい過ちという表現がドキッとした。意志の強さはこの時代に大学に行つて、学士様と呼ばれたりしながらも我慢して生きる強さから来ていると思いました。私にはそんな強さはないなと思いました。」

「本当は祖母も何かを叫びたかったのかもしれない。言葉にならない叫びが寢床に臥せることになっている。この時代の女性は今と違い、声を上げたくても上げら

れなかったと感じさせます。朱鷺子は、私は嫁には行きたくはありませんとはつきりといった。この時代にこんなにもはっきりと断れる女性はどれほどいただろう。自分の心にうそをつき誰かの妻になることへの罪悪感を押し殺し結婚する女性が多くをしめていた時代に。きっと祖母はそのうちの一人だったのだ。心に刺さった棘が祖母を寝床へうちつけている。」

筆者の考察②

授業での補足をする前までは朱鷺子の縁談についての感想には、見合い結婚への理解ができないという思いが多く綴られていた。そこには祖母の生き方と朱鷺子の生き方との対比として解釈する視点は全く見られない。すなわち「己の淵に沈むばかりで、踏みとどまって底を覗こうとしなかったためだ。怠惰を安定と見間違えたためだ。」という一文の理解が全くなされていない。

ところが補足説明を受けることで、朱鷺子と祖母の生き方の対比がより鮮明に学生に理解され、そのことにより朱鷺子の決断と先生への愛の強さが際立つような解釈に深まった。

四、総括と課題

本稿では、学生に普段読んでるように読書させた直後に感想文を書かせ、記述後に補足説明を受けてから再度感想文を書かせて、「両者の比較、考察をおこなった。その中で、ただ一人の学生は、初見で各々の描写に深く寄り添いながら解釈していた。彼女は齢五十半ばを過ぎた社会人入学生である。彼女は男女雇用機会均等法以前に社会に出ている。だからこそ女性が社会のなかで、今とは違う役割を求められていた時代を肌で感じながら生きてきた。そのような解釈の素地が等身大の人生の中で醸成されている。

しかし他の大半の学生には理解が及ばない箇所が多々存在し、今作品の解釈を皮相なものとする要因となっている。

このように文学作品を解釈するのに必要な、時代や文化に対する知識をどのよう

に補えば、理解や解釈が深まるかが今回の取り組みによって、少なからず示唆された。特に現代小説では、一見補足など必要のないように思える内容であっても、理解する側の「教養」としての素地は、解釈の深さに影響を与える。今後さらに、教科目として文学を学ぶことにおいて、時代背景や風俗風習などの不理解からくる解釈の浅さを、文学以外の幅広い知識を補うことにより、解釈の深みを促すことにつながっていくことが課題である。

1. 「骨片」『きみはボラリス』三浦しをん 新潮文庫2011年 p156
2. 同上 p157
3. 同上 p158
4. 文部科学省「学校基本調査」
5. 前掲書「骨片」 p166
6. 同上 p167
7. 同上 p173
8. 同上 p176
9. 同上 p176—177
10. 恋愛結婚・見合い結婚比率「第15回出生動向調査」

—2019.9.28 受稿、2019.9.30 受理—